早稲田大学大学院文学研究科紀要 第70輯（2025年3月）
Bulletin of the Graduate School of Letters, Arts and Sciences of Waseda University Vol.70 (Mar.2025)

優秀修士論文概要

オスマン朝のエジプト支配とカイロ城塞圏の社会：軍人・支配層の生活世界を読む（1517–1704）

森　　才　人

本稿では、16–17世紀におけるオスマン朝期エジプトの政治・軍事史を、社会史的な観点から、すなわち、カイロ城塞という歴史的現場をベースに軍人・支配層の生活世界を読み解く、という問題意識のもとに再検討した。そこで対象とした軍人層や支配階層の人びとは、非軍人あるいは被支配者たちと日常的に関わり合う社会のなかを生きていた人間であり、彼らの生活環境に焦点を当てることで、政治・軍事史の新地平を切り拓くというのが、最大のねらいであった。

序　論

本章では、議論を始める前に先行研究の問題点を整理しながら、本研究の位置付けについて論じた。従来の研究の課題は、２つの観点から指摘できた。まず史学史的な観点から、軍人・支配層を研究するうえで彼らの生活環境や社会生活の考慮が十分に行われてこなかったことについて述べた。次に実際のオスマン朝期エジプトの政治・軍事史研究の観点からも、そこで対象となる人物がどこに住んでいたか、あるいは政治的事件が具体的にどのような場所・空間で繰り広げられたか、という点が等閑視されてきたことを指摘した。こうした社会史的視点の欠如が最たる課題であるが、同時に、エジプト州の支配者としてオスマン朝中央から派遣されてくる総督が、議論の領野から外されがちであった点も先行研究の問題であった。エジプト総督はカイロ城塞に居を構えていたオスマン朝期エジプトの統治者であり、ここに、本稿が焦点を当てる舞台が登場する。当城塞には、オスマン朝の軍隊であるイェニチェリとアザブも拠点を構えており、この両軍団とエジプト総督の三者が、本稿での主要な研究対象たる軍人・支配層である。併せて、主題でカイロ城塞圏と表現したように、カイロ城塞という空間に限定せず、城塞と関わりながら展開した政治的事件については、カイロ城塞外部で起きたものであっても研究対象とすることとした。また、研究対象年代が、オスマン朝がマムルーク朝を滅ぼした1517年から17世紀最後の総督であるカラ・ムハンマド・パシャの任期（1699–1704）までの期間であることについても述べた。これは、17世紀になってエジプト総督の政治的重要性が後退したという従来の見方から、その時期にエジプト州政治の分権化が進展したという捉え方へ議論を転回させるため、16世紀から17世紀を通じて、エジプト州政治の展開を検討することを意図したものであった。

続いて、本稿で用いる史料の概略について述べ、最後に本稿の構成について整理した。

第１章　カイロ城塞：支配者の居城として

本章では、カイロ城塞が、アイユーブ朝期からムハンマド・アリー朝期まで、エジプトにおける支配者の居城であった点に着目し、オスマン朝期における政治的中枢としてのカイロ城塞について論じた。

第１節　マムルーク朝期のカイロ城塞

マムルーク朝のスルタンによる改築事業が、オスマン朝期におけるカイロ城塞のあり方の基礎となったため、まずはその点について本節で確認した。そこでは、バイバルス期に軍事・行政機能を備える北区画とスルタンの私的居住領域である南区画という棲み分けが行われ、その後のナースィル・ムハンマド期には、南区画の南部に、後にスルタンのハレムが置かれる場所となる、ハウシュ（al-Ḥawsh）と呼ばれる場が整備されたことを述べた。続いて、このハウシュが後期マムルーク朝において、公的行事の行われる場所へと変貌した点に着目した。

第２節　ハウシュでのセリムとハーイル・ベイ

本節では、オスマン朝による征服直後のカイロ城塞について、特にハウシュの扱われ方に注目しながら論じた。まず、マムルーク朝を征服したセリムがカイロ城塞を掌握し、その周囲にオスマン朝の軍人を住まわせたことを明らかにした。しかし、彼はマムルーク朝のスルタンのように、ハウシュで公的行事を行うことはしなかった。そうしたあり方が復活するのは、彼によってエジプト総督に任命されたハーイル・ベイの任期であった。彼がそこで、マムルーク朝のスルタンの建造したマクアド（al-maqʿad）という建築物を使用していた点も併せて取り上げた。

第３節　総督府とエジプト総督

ここでは、エジプト総督が行政と生活の拠点として用いた総督府の実態について解明することを試みた。具体的には、総督府の建築構造やその用途について、できる限り詳細に明らかにした。そこでの議論から、オスマン朝期の総督府がマムルーク朝期の建物を統合し、再利用したものであったと結論づけた。こうした点に、マムルーク朝期からの継続性が看取される。

第２章　オスマン朝支配初期カイロにおける軍人層の生活圏

第１章で扱ったのは主にカイロ城塞の南区画であったが、本章では北区画の方に光を当てた。それは、軍人層の生活圏について、具体的な都市空間から明らかにするためであった。なお本章の研究対象年代は、オスマン朝支配初期にあたる1517年から1530年代である。

第１節　征服直後の軍人層とその居住区

本節では、征服直後にオスマン朝の軍人たちが住んでいた場所について明らかにした。要点のみいえば、イェニチェリ軍団はカイロ城塞内部に居住し、他の軍団に関してはセリムが命じたようにカイロ城塞周辺の街区に暮らしていたと推察される。この時点の史料では、まだアザブ軍団への言及はみられない。

第２節　カーヌーンナーメイ・ムスルの発布

ここでは、エジプトにおけるオスマン朝の支配機構の基礎となった1525年発布の法令集カーヌーンナーメイ・ムスルのなかの、軍人の居住区に関する規定を読解した。そして、イェニチェリとそれに準ずるアザブ軍団はカイロ城塞内部に、そのほかの軍団はカイロ城塞周辺の街区に住むよう定められており、征服直後のあり方が改めて法令として規定されたことが明らかとなった。

第３節　スライマーン・パシャによるカイロ城塞北区画の開発

本節では、1530年代にエジプト総督スライマーン・パシャ（r. 1525–1535, 1536–1538）が行ったワクフ設定について、そのワクフ関連文書から考究した。彼のワクフの特徴は、自身がカイロ城塞に新設した諸物件をワクフ財あるいはワクフ受益対象に設定しているところである。そこで、彼のワクフ関連文書における、物件の構造や用途、そこで働く各種スタッフの職務規定に関する記述から、カイロ城塞内部に存在した具体的な都市空間のみならず、そこで営まれた社会生活に至るまで、詳しく論じた。また、そこで再現したカイロ城塞北区画の都市空間の一部からは、イェニチェリ軍団とアザブ軍団が共住していたことが明らかとなった。これは、両軍団が征服当初から対立関係にあったため、カイロ城塞内部において空間的な棲み分けを行っていたとしてきた従来の研究に、根本的な再考を促す新知見である。さらに、スライマーン・パシャのワクフ運営スタッフとして一部の軍人が働いていた可能性についても明らかにした。

第３章　軍人・支配層の在地化とエジプト州政治の分権化に関する一試論

本章では、16–17世紀を通時的にみながら、その時期に進んだオスマン朝軍人・支配層の在地化とエジプト州政治の分権化について検討した。特に、エジプト総督の動向とカイロ城塞圏という場に焦点を当てて議論を展開した。

第１節　軍団構成員の多様化

本節では、エジプトにおけるオスマン朝の軍団に、次第にデヴシルメ制度を通じて徴用されたカプクル軍人以外の人びとが流入していく点について論じた。それは、カプクル軍人の兄弟や子どもに加え、商人・職人層を含む現地のアラビア語話者たちなどであった。こうした傾向は、オスマン朝の軍人・支配層が、現地の人びとと結婚し、カイロに世帯を築くようになったこととパラレルなものであったと推察される。

第２節　エジプト総督をめぐる政治の展開（1517–1704）

ここではまず、17世紀末に執筆された政治思想の著作から、エジプト総督の統治理論を検討し、そもそもその権限がオスマン朝によって制限される場合があった点を確認した。そのうえで、エジプト総督をめぐる政治の展開について、彼の解任方法にも着目しながら、検討した。そこでは、都市における政治のアクターが徐々に多様化していくことが明らかになった。17世紀にはそうしたステークホルダーたちによる抗議行動が頻発し、それがエジプト総督の解任に結果することも多かった。これは丁度、同時期にイスタンブルにおいてオスマン朝君主が軍人などによる騒擾で度々廃位されたことと同様である。つまり、17世紀の分権化の状況にあって、エジプト総督にはオスマン朝君主と同じように、さまざまな利害関係者のあいだでバランスを取りながら統治を行うことが求められたのである。

第３節　17世紀末カイロ城塞圏における政治生活の諸側面

本節の前半部では、17世紀末に起こった、カイロ城塞内のイェニチェリ軍団拠点をめぐるイェニチェリの党派争いに着目した。そこでは、イェニチェリの下士官が一時エジプトの政局を握ったこと、その際、イェニチェリ軍団拠点を中枢として利用したことを論じた。また、そこで読解した史料の記述から、

イェニチェリ軍団拠点が兵営を兼ねていたわけではなかった可能性も指摘した。後半部では、イスマーイール・パシャ（r. 1695–1697）によって立て続けに行われた各種式典に焦点を当てた。そこでは、そうした式典が当時政治的に利用されていたこと、その参加者の多様性が政治の分権化の象徴として捉えられることについて論じた。

終　章

最後に、まずこれまでの議論で明らかにした点について順に整理した。そのうえで、本稿の問題点として、オスマン語年代記や人名録史料を参照できなかったこと、カイロが中心でその他エジプト諸地方の状況をあまり考慮できなかったこと、そして、当時の人びとの心性にまで踏み込んだ議論ができなかったことを挙げた。そうした点を課題に、今後さらなる研究を進めるとして、本稿での議論を終えた。